優秀賞

# ぼくの名前だけ

和歌山県 智辯学園和歌山小学校四年 藤原 崇雅

夏休みの土曜の午後、ぼくは大量の宿題とかくとうしていた。やっと今日の分の勉強を全部やり終えたと思ったしゅん間、

「しゅうが、今からおばあちゃんに会いに、老人ホームに一緒に行こうか。」

と、お父さんがぼくに言った。ぼくは「えっそれはないよ」と心の中で思った。

ぼくのひいおばあちゃんは老人ホームに入っている。ひいおじいちゃんが亡くなった後の五年前からそこでくらしている。コロナになる前までは、家族みんなでよくひいおばあちゃんに会いに行っていた。けれど最近はあまり行けていなかった。

お父さんにさそわれたけれど、今日のぼくは老人ホームに行きたくない気分だった。なぜなら、勉強が終わって今からやっと遊ぼうと思っていたところだったからだ。それに、ひいおばあちゃんに久しぶりに会うから、ぼくのこと忘れているかもしれない、と思って少し心配だった。だけどお父さんとお母さんに言われて、いやいやついて行くことになった。

老人ホームに着くと、しょく員の人に車イスをおされた一人のおばあさんがぼくたち家族の前に連れてこられた。ぼくは一しゅん誰だか分からなかった。ぼくが知っているひいおばあちゃんとはちがった。かみの毛も真っ白になっていて、体も小さくてすごく細くやせてしまっていた。

ひいおばあちゃんは、ぼくたち三人の顔をじっと見た。お父さんの顔もお母さんの顔も少し忘れていたようだ。誰だろうと不思議そうな顔でながめていた。けれどぼくの顔を見るとすぐに、

「しゅうが君、しゅうが君よな。」

と言ってくれた。ぼくの名前だけ呼んでくれた。ぼくの名前だけ、はっきりと覚えてくれていた。ぼくはとてもびっくりした。お父さんとお母さんもおどろいていた。

「しゅうが君、大きくなったな。」

前にくらべてあまり話せなくなっているのにそれだけははっきりとした声で言ってくれた。そしてぼくたち三人が帰るまで、車イスのひいおばあちゃんはずっとぼくだけを見ていた。

老人ホームからの帰りの車の中で、ぼくはやっぱり今日会いに行って良かったな、と思った。ひいおばあちゃんは、最後に、

「しゅうが君、遠い中来てくれてありがとう。」

と手を少しだけふりながら、ぼくにバイバイもしてくれた。その手が本当に小さくて、ぼくは絶対にまた近いうちにひいおばあちゃんに会いに行こうと心に決めた。